

(19) 日本国特許庁 (JP)

登録実用新案公報 (U)

(11) 実用新案登録番号

第3027097号

(45) 発行日 平成8年(1996)7月30日

(24) 登録日 平成8年(1996)5月15日

(51) Int.Cl. ⁶
E04D 1/34

識別記号 庁内整理番号
B

F I

技術表示箇所

評価書の請求 未請求 請求項の数4 FD (全6頁)

(21) 出願番号 実願平8-649

(73) 実用新案権者 596021355

(22) 出願日 平成8年(1996)1月22日

株式会社日下部修作商店
新潟県三条市北入蔵3丁目11番25-2号

(72) 考案者 近藤 克之

千葉県市川市曾谷6丁目9番23号

(72) 考案者 日下部 安則

新潟県三条市北入蔵3丁目11番21号

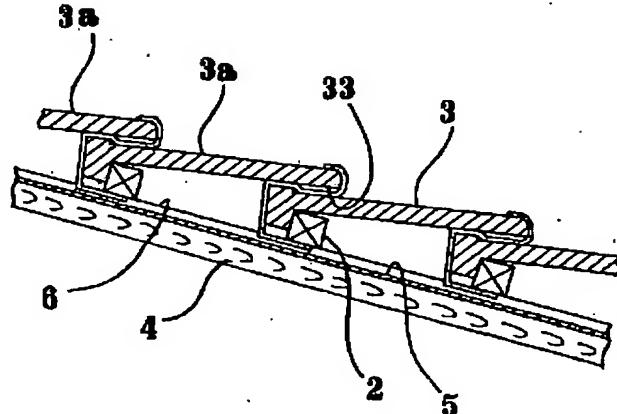
(74) 代理人 弁理士 近藤 彰

(54) 【考案の名称】屋根瓦の止着構造及び瓦用クリップ

(57) 【要約】

【目的】 強風による瓦の飛散などを防止するための、簡単な手段で瓦の屋根への確実な止着が実現できる瓦葺構造を提供する。

【構成】 長尺金属板をコ状に折曲し、対向辺間に開拡方向に弾力性を具備せしめた瓦用クリップ1を使用して、屋根の瓦棧2に係止した瓦2を、瓦棧2と一緒に挟持する。



1

【実用新案登録請求の範囲】

【請求項1】 長尺金属板を所定の高さを有せしめてコ状に折曲し、対向辺間の開拡に対し所定の反発をなす弾力性を具備せしめると共に、上辺板の先部を、瓦の上面水返し突部に対応する段落部に形成してなることを特徴とする瓦用クリップ。

【請求項2】 長尺金属板を所定の高さを有せしめてコ状に折曲し、折曲部分の対向辺間の開拡に対し所定の反発をなす弾力性を具備せしめると共に、上辺板の基部近傍を、瓦の上面水返し突部に対応する段落部に形成しすると共に、使用対象の瓦の大きさに対応して先端部分を折り返し、瓦受け部を形成してなることを特徴とする瓦用クリップ。

【請求項3】 屋根の瓦棟に、瓦の上縁下面を係止すると共に、請求項1記載の瓦用クリップで、瓦と瓦棟とと一緒に挟持してなることを特徴とする屋根瓦の止着構造。

【請求項4】 屋根の瓦棟に、瓦の上縁下面を係止すると共に、請求項2記載の瓦用クリップで、瓦と瓦棟と一緒に挟持し、瓦用クリップの瓦受け部に、当該瓦の直上に連続して葺く瓦の下縁部分を嵌合してなることを特

2

徴とする屋根瓦の止着構造。

【図面の簡単な説明】

【図1】本考案の第一実施例のクリップの斜視図。

【図2】同クリップを使用した瓦止着構造の説明図。

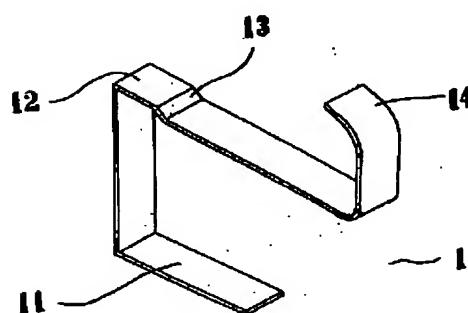
【図3】本考案の第二実施例のクリップの斜視図。

【図4】同クリップを使用した瓦止着構造の説明図。

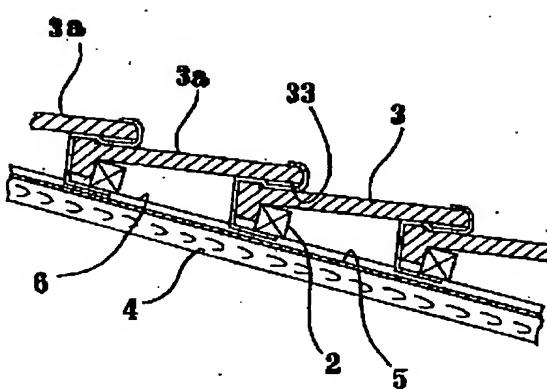
【符号の説明】

1, 1a	瓦用クリップ
11	下辺板
12	上辺板
13	段落部
14	瓦受け部
2	瓦棟
3	瓦
31	係止部
32	水返し突起
33	下縁
4	野地板
5	下地材
6	縦棟

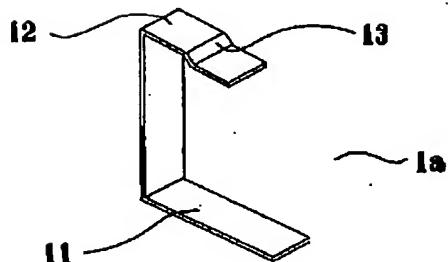
【図1】



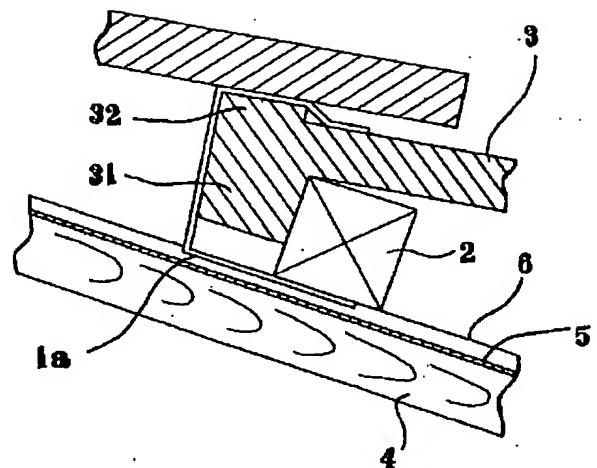
【図2】



【図3】



【図4】



【考案の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】

本考案は、屋根の瓦葺に際して使用する瓦用クリップ及び、前記瓦用クリップを採用した屋根瓦の止着構造に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

瓦による屋根葺は、一般に屋根の棟に平行に設けた瓦棧に瓦を係止し、順次上方の瓦の自重で、下方の瓦を抑えるようしており、又釘を使用して止めている場合もある。

【0003】

【考案が解決しようとする課題】

ところでこのように瓦の自重で瓦葺きを行っている場合には、強風に際して瓦が飛んでしまう虞があり、また地震に際しては容易に落下する虞がある。また釘による止着は、釘着作業時に瓦を破損する虞もあり、煩雑な作業となり、而も釘孔が雨漏りの原因になる場合もある。

そこで本考案は、簡単な手段で瓦の屋根への確実な止着が実現できる瓦用クリップ及びそのクリップを使用した屋根瓦の止着構造を提案したものである。

【0004】

【課題を解決するための手段】

本考案に係る瓦用クリップは、長尺金属板を所定の高さを有せしめてコ状に折曲し、対向辺間の開拡に対し所定の反発をなす弾力性を具備せしめると共に、上辺板の先部を、瓦の上面水返し突部に対応する段落部に形成してなることを特徴とするものであり、また特に前記クリップに於いて上辺板を使用対象の瓦の大きさに対応して長くし、先端部分を折り返して瓦受け部を形成してなることを特徴とするものである。

そして屋根の瓦棧に、瓦の上縁下面を係止すると共に、前記の瓦用クリップで、瓦と瓦棧とを一緒に挟持すると、瓦は屋根にしっかりと取り付けられることになり、更に瓦用クリップの瓦受け部に、当該瓦の直上に連続して葺く瓦の下縁部

分を嵌合してなると、瓦は上下縁でクリップで係止されることになり、よりしっかりと取り付けられる。

【 0 0 0 5 】

【 実施例 】

次に本考案の実施例について説明する。

図1及び図2は本考案の瓦用クリップの第一実施例を示したもので、この実施例に係る瓦用クリップ1は、長尺金属板を所定形状に折曲して形成したものである。第一の折曲部分は、基部をコ状としたもので、その高さは、後述するように家屋の屋根面の瓦葺き下地として形成された瓦棧2に、瓦3を係止した瓦葺き状態に於いて、瓦棧2の底面から瓦3の上面までの高さに対応させてなる。また下辺板11は瓦棧の幅に対応した長さであり、上辺板12は瓦3の水返し突起32の幅に対応して段差部13を設け、前記上下板11, 12でその対向辺間の開拡に対し所定の反発をなす弾力性を具備せしめ、更に瓦葺きを施した際の棟方向に葺かれる瓦3aの下縁位置に対応して折り返し、瓦受け部14を形成してなるものである。

前記瓦用クリップ1を使用して瓦葺を行うには、従前の瓦葺と同様に、屋根の野地板4上に瓦葺き下地材5を張設し、下地材5上に棟から軒先まで縦棧6を設け、その縦棧6上に棟と平行に瓦棧2を形成しておく（瓦棧2は通常棟から軒先への縦棧上に設け、瓦棧2の底面と屋根下地との間に空隙が存在するが、特に縦棧を備えていない屋根でも適用できる）。そしてこの瓦棧2に瓦3の上縁下面の係止部31を係止すると共に、前記の瓦用クリップ1で、瓦3と瓦棧2とを一緒に挟持する。特に段落部13が瓦3の水返し突起32に係合するので、クリップ1が離脱することなく瓦3を瓦棧2にしっかりと装着される。更に瓦用クリップ1の瓦受け部14に、当該瓦3の直上に連続して葺く瓦3aの下縁部分33を嵌合する。

【 0 0 0 6 】

従って瓦3は、その基部（棟側）をクリップ1で瓦棧2に固定され、先端部分（軒先側）が、固定しているクリップ1に嵌合するので、瓦がしっかりと屋根に取り付けられることになり、強風などによる飛散を確実に防止でき、而もクリップ

ブ取り付けは容易に実施できるものである。

また本考案は、図3及び図4に例示するように、上辺板12を、段落部13までのクリップ1aとし、瓦3の上縁部分を瓦棧2と一緒に挟持し、瓦3の先端の保持を行わない構造であっても良いし、先端保持のための瓦受け部の形状もコ状等適宜定められるものである。

【 0 0 0 7 】

【 考案の効果 】

以上のように本考案は、長尺金属板をコ状に折曲して形成した瓦用クリップ及びこのクリップを使用して、瓦を瓦棧と一緒に挟持することで、瓦を屋根にしっかりと取り付けるようにしたもので、簡単な手段による瓦の屋根への確実な止着を実現したものである。